
恋姫 + 異伝 混沌の騎士

佐山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫十異伝 混沌の騎士

【Zコード】

N6413P

【作者名】

佐山

【あらすじ】

ここにまた、新た外史の扉が開かれる。

彼はこの外史にどのような物語を紡ぎ、どのような結末を迎えるのか・・・

さあ、外史の扉を開こう。

初めてまして、佐山といいます。皆様方のすばらしい作品を読むにつけ、自分の中の妄想を抑えきれず、この度、投稿することを決心し

ました。

当作品は作者の自己満足な初投稿、初二回目作品です。
原作ブレイク等々なども含みます。
作者はとても影響されやすいです。
他の先生方の内容にどことなく似ているかもしません。
これらの内容を含みますので、苦手な方はどうかブラウザのバック
ボタンなどでお戻りください。

外史準備（前書き）

このよつたな駄文を見てくだせり、ありがとござります。

外史準備

突然だか俺は今、とんでもなくマズイ状況に立たされてる。というか死にかけてる。

簡単にまとめると

俺、コンビニのトイレに駆け込む

長い戦いを終え出たら、強盗が店員さん（かわいい）にナイフをちらつかせ金要求

正義感に駆られ、後ろから羽交い締めにする俺

警察がくる

警察を見て最後の抵抗か、暴れだす強盗

その拍子で俺の拘束が解ける

振り回したナイフが俺の胸に刺さる（心臓直撃コース）

俺倒れる 今ここ

どうやら強盗はしつかり、お縄になつたらしい
警察官が倒れてる俺に近づき何か言つてゐる。

「・・・っか・・・・だ・・・・」

何を言つてゐるのかよく聞き取れない

そもそもしない内に救急車が着いたのか担架が来て俺を乗せようとしてる。

今度は救急隊の人人が話しかけてくる。

「…………」

口をパクパク動かしてるので何も聞こえてこない

こうなつたら俺でもわかる、俺はもうダメだ。

自然にゆっくりと瞼が閉じていく。

そして叶わないだろうが、願わずに入れなかつた。

(もう少しだけ生きたかった……)

俺の意識は徐々に墜ちていく

だが、聞こえないはずの耳が最後に音を拾つた。

『うひうひ』
『…………その願い叶えてやる』

「ぬおおおおー！」奇声を発しながら飛び起きる。

「…………ん？あれ？痛くない？」

刺された箇所まさぐりながら、自分の体を確認していく。

「え？ なんとも……ない？」

胸の辺りを見てみるが、傷が無いのは勿論、服には穴は空いて無いし、血も付いていない

「おっ？ おおっ！ やつた！ 生きて」「残念ながら生きておらん」 るう・
・・「うう？」

後ろから不吉な言葉が聞こえた。

振り向くとそこには

「・・・」

やたらダンディなおじ様がいた。着崩したスーツがカッコイイ

「あ？ あの、自分が生きてないって、どうい・・・う？」

ふと喋りながら気づいた、俺は今どこにいる？

それに病室にしては周りが白すぎないか？

「・・・やつと気づいたか、もう一度言つが、お前は死んだ。そして此処は死んだものが通る天界への道の一つだ」

「よつ超展開だー！」

リアルにこんな事が起きるなんて・・・

じゃあこの人は・・・

「俺はお前が考へているものとは少し違う、確かに神は神だが、お

前が思つてゐるよつた全知全能なモンぢやない、・・・『元』土地神
だ、まあそれも元が外れようと/orしてゐるがな

どう違うんだ？

「一応・・・その神様は、自分なんかになにか御用でしょつか？特に悪い」ととかしてはないと思つんですが？」

何も思い当たらない・・・特に誰かを助けたりとか褒められるような事はしてないし・・・まさかあの店い「彼女は関係ないぞ」・・・さいですか・・・というか思考が駄々漏れ、もとい読まれているみたい。

「お前は覚えてないかもしけんが、俺はお前と昔約束をしたんだ」

「約束・・・ですか？それはいつ？どんな事を？」

まつたく覚えがない、前世的のことか？

「覚えてないのも無理はない、お前が幼少の頃の話しだ。（もつともその記憶は俺が封印したがな）」

・
俺が子供の頃？田舎に住んでた時の事か？・・・全然思い出せない・

「約束の内容は、『お前に不幸が起きたら、その時は必ず助けてやる』だ…すまなかつたな」

いい終わると同時に頭を下げる神様

「・・・頭を上げてください、神様。全然氣にしてないわけじゃないんですけど、あれは誰のせいでもないんですから・・・それに俺その約束全然覚えてませんし・・・」

俺の言葉を聞き頭を上げる神様、けれど、どこか納得いかない様子だ

「・・・ありがとう、だがそれでは約束した俺の気がすまない、だから変わりに、お前を別の世界に転生させようと思う、それにお前の最期の願い『生きたい』を叶えると言ったしな」

それはとてもありがたいんだが・・・

「あの〜、自分が送られる世界とはどんなところなんですか?」

そつここれが問題である。ある意味これで俺の命運が分かれる

「・・・お前には悪いと思つたが、その世界は人同士の争いが起きてる所だ。すまない・・・俺の力ではこここの道しか開くことが出来なかつた・・・」

なん・・だ・・と?

俺の命運は決まった・・・

「安心しろ!・・・とはあまり言えんが、一応戦える力を「くれるんですか!」話は最後まで聞け!」

「すみません・・・」

しゅんとする俺、だがこれで活路がみえたか?

「んんつ・・・力はやる、だが変わりにリスクがある」

咳ばらいをしつつ答える神様

へつ？リスク？

「それはどのよつな？」

「ああ・・・最初に言つたとおり俺はしがない元土地神だ、だからお前が考へてるような神とは違ひ完璧な仕事ができない」

「と言ひつと？」

「要するに今からお前に力を与えるが、その力のモデルとなつたモノの姿になつてしまふんだ」

ん？別にそれぐらい・・・までよ・・・まさか

「勘がいいな、そのまさかだ、そのモ『テルは・・・人ではない』

なつなんだてー！

「なつなんだてー！」

おっ俺はいつたい何になるんだ！

「落ち着け、そこまで人外・・・では無いと思つが形としては一応

人型だ」

とても不安だが、安心していいのか？

「見せてもらえたりとか・・・できますか？」

駄目もとで尋ねてみる

「いいぞ、元よりその積もりだ」

神様はそう言つと、手を虚空にかざし光が溢れる。

その光は徐々に人の形をとつていき光が収まるとそこには・・・

「つーじつこれは！」

全身を灰色と蒼の鎧を身に纏い、背中には暗い蒼の外套。右手には身の丈ほどある槍を持ち、左手には体の大半を守れるほどの大丸盾・・・そうそれは俺が小さい頃、放送していたアニメに出てくる聖騎士型デジモン『デュークモン』の反存在・・・『カオスデューグモン』が俺の目の前に現れた。

「ちょっと待てええい！」

これは何だ！？いやモノはわかる。とても凄いものだと、というかある意味これも完璧だろ！？なんで神様がこれを！

俺はなんでこれにしたのか聞くため、光の速さで神様の方を振り向くと

「どうだ？気に入つたか？」

若干目がキラキラワクワクしてゐー！

そこには、どうだ凄いだろ！と言つ感じにで、確實に俺が喜んでくれるであろうと思っている神様がそこにいた・・・

「・・・あつあの、コレにした訳は？」

多少フリーズしながらもたずねる

「理由はコレだ」

神様は手の平に光を集め、また何か出そつとしている。
出でてきたのは

「・・・DSのソフト・・・」

なんでもまた？

「これは生前お前が持つていたもんだ、これとお前の記憶を参考に
それでもひつた。」

そつとひそれを俺に投げ渡す

「おつとと・・・えーとデジモンストーリー ロストエボリューシ
ョン・・・まさかコレのパーティにこたせりですか？」

「そうだ、データのモノを実態化させんぐうになら俺にも出来るか
らな

俺にはそれの方が難しく聞こえる・・・
思わず頭を抱えたくなった。

悩んでも仕方ない、生きれるだけでもめつけモンだ。前向きにこいつ

「で、コトビクすればいいんですか？」

出して貰つたのはいいが、ビリのコトを俺の体に？

「近づいて入ればいいだけだ」

「え？」

「今のお前は魂だけの存在、その器としてそれがある。安心しろすぐにつくらむ」

なーる、では早速

カオスデユーラクモンに近づき向かって呟つ俺
でかいな

「短い付き合いでなるか、長い付き合いでなるか、わからないけど
宜しく頼むぜ」

そうこうと俺の体が光の粒子に変わり、カオスデユーラクモンに吸い込まされていく

「…………む？・・凄いな、力が溢れ出でてくるようだ」

体の調子を確かめる様に動かしていく

「ちゃんと定着できたみたいだな」

おっ、神様。お礼言わんと

「ああ、おかげさまでな。これなら生き残る」とができるだらう」

・・・なんか口調が？

「それは魂が体に影響されたんだらう、時期に慣れる」

なるほど・・・対して気にするもんじゃないだろ。

なんか思考で会話するのも慣れたな

けどこれで本格的に人間とはおさらばか・・・

「すまんな・・・俺にも少し力があれば・・・」

申し訳なさそうに顔をしかめる神様

「大丈夫だ、こひして俺を助けてくれたんだ。十分過ぎるべらいだ」

「わづか・・ではそろそろ、お前を別の世界に飛ばすとしょう」

そう言うと神様のかざした手が光を放つ、すると俺の前方に渦のような穴が出現した。奥からほどこかの景色が見える。

「・・・何から何まですまんな、今の俺にはお礼しか言えん」

「俺が好きでやつてるだけだ、・・・まあ行け」

少し照れてるのか顔を指でかじりながら俺を促す

本当にありがとうございました、神様

「・・・行ってくる」

俺は前に歩み、渦に入つていいく。
すると後ろから神様の声が聞こえた。

「パートナーを探せ、お前の力になつてくれるはずだ」

「それはどうこう・・・」

俺は聞き返そと振り返るが、ちょうど渦が閉じてしまい、それは
叶わなかつた

「・・・仕方ないな、それにしてもマントがなびいてカッコイイな

悩んでも仕方ないので、先に進む。
新たに生きる世界に思いを馳せながら

「・・・行つたか」

「そのようですね~」

突如誰もいなかつたはずの背後から声が聞こえた。
だがそれに慌てる事なく振り応える

「俺を連れてくいくのか？」

「ええ、出来れば穩便に済ませたいんですけど……来てくれます？」

笑みを絶やさず、尋ねてくる優男風の男

「頼みを聞いてくれたら、大人しく着いていこう」

「……さきほど彼の事ですか？」

「ああ、最後にアイツに餞別をな」

それを聞くと少々考え込む優男

「ふむ……まあいいでしょう。私は貴方と違い、力の行使も隠蔽も得意ですし、力の大半を使用したとはいえ貴方とは争いたくはありませんしね」

仕方ありませんね、といった感じに若干肩をすくませながら、了承する

「ですが彼は気づきますかね？贈り物に？」

「さあな、それはアイツ次第だ」

外史の準備は整った。

さあ外史の扉の開こう。

外史準備（後書き）

感想等々、お待ちしています。

誤字脱字などもありましたら、お手数ですが「」報告をお願いします。
批判などはできるだけソフトに・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6413p/>

恋姫+異伝 混沌の騎士

2011年1月4日01時14分発行